

函館地方の緑化樹の害虫（Ⅲ）

館 和 夫

はじめに前回（36号）その一端を紹介したウメ、サタラ類の害虫について若干補足する。
モンクロシャチホコ

幼虫はサクラケムシ、フナガタケムシともよばれ、この地方では1972年8月亀田地区のサトザクラやシラカンバに大発生した。年1世代で成虫は7月に羽化する。8月頃みられる中齢幼虫（写真-1）は暗紅色をおび、むらがって葉を食害する。老熟幼虫は体長約50mm、紫黒色の胴部に黄白色の長毛を生ずる。9月下旬～10月上旬に幹近くの土中に入って蛹で越冬するが、蛹化前に地表で死亡するものが多く、連年大発生することはまれのようなのである。



写真-1 モンクロシャチホコの中令幼虫

防除方法は群がっている幼虫を枝ごと切りとって焼くか、またはディブテレッタス乳剤などの1000倍液を散布するとよい。
イラガ

老熟幼虫は体長15mmのずんぐりした黄色い虫で背面には紫色の斑紋があり、また毒毛をもつ多数の突起があつて、触れると激しく痛むので俗にデンキムシともよばれている（写真-2）。年1世代で、幼虫は6月下旬～7月上旬に羽化し、幼虫は夏から秋にかけてサクラやウメのほかカエデ類、クリ、クルミなど多くの樹の葉を食害したのち10月上旬に蛹化・越冬する。

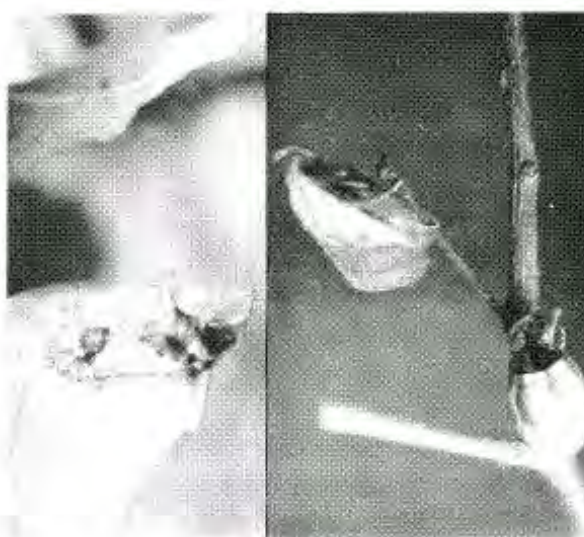


写真-2 イラガの幼虫と成虫・越冬蛹

防除方法は発生の少ないときには幼虫や蛹の捕殺を行えばよいが、大発生した場合はカルホス、エルサン

またはディプテレックスなどの乳剤・水和剤の1000倍液を散布する。

その他、今春めだったウメ、サクラ類の害虫としてはオビカレハやエゾシロチョウをはじめ、ウメシロカイガラムシ、カタカイガラムシの一種、ウメコブアブラムシなどがあり、ボケなど近縁のバラ科樹木にもヒメシロモンドクガ、モンシロドクガ、マイマイガなどが例年よりやや多くみられた。これらはいずれも幼虫のふ化期または若齢期に有機燐剤を反復して散布すれば防除できる。ただしDDVPやスミチオン乳剤は標準濃度（1000倍液）でもサトザクラの一部の品種（関山、福祿寿など）には薬害があるといわれ、エルサン乳剤も同様に展葉期のオオヤマザクラには薬害の出る場合があるので注意を要する。

コリンゴ類

リンゴスガ

コリンゴ（ズミ）やエゾノコリンゴ、マルバカイドウなどに多い害虫で、年1世代。幼虫は体長18mm内外、胴部は灰色で背面の刺毛の基部に2列の小黒斑がある。幼虫越冬し6月ころ枝葉に細密なクモの巣状の糸をかけながらしだいに全葉を食いつくすほどの被害を与える（写真-3）。6月下旬～7月上旬に蛹化し、7月上・中旬に羽化する。成虫は開張18～20mm、灰白色の翅に微細な黒点を散布する小蛾である。

防除方法は、被害の初期に枝ごと切りとって焼却する。切除が困難な場合には熊手などで巣を取りはらうとともに、リンゴ園の防除法に準じてスミチオン40%水和剤（1000～1200倍液）を散布すると有効である。ただし、高濃度のものを使用すると葉に薬害を生ずる場合があるので注意を要する。

ニセアカシヤ

ハリエンジュノアブラムシ

近年、7月上・中旬になると市内のニセアカシヤの街路樹に

多発し、通行人の衣類に付着したり、屋内に飛び込んできたりして苦情のもとになる害虫である。無翅胎生雌虫は青みがかかった黒色で体長1.5mm前後、新梢や剪定後の萌芽枝におびただしく群がって吸汁するため、被害はねじれたりしおれたりして生長が止まる。（写真-4）。



写真-3 リンゴスガの被害

防除方法はエストック乳剤（1000 倍液）を早期に散布するのがよい。

ツゲ類

ツゲノメイガ

ツゲ類のうち、とくにクサツゲに多発するもので、年2世代。幼虫は5月中旬および8月中・下旬出現し、糸でつづった枝葉の中にひそんで食害する。被害枝はしだいに黄変し、または表皮や葉脈だけが白く変色したまま残されるので非常に見ぐるしくなる（写真-5）成虫は開張 25~30mm、翅の外縁が淡黒色のやや大型のメイガで7月上旬と9月上旬に多く羽化する。

防除方法として、被害の初期にエルサン乳剤（1000 倍液）を散布すると効果がある。



写真-4 ハリエンジュノアブラムシ
によるニセアカシヤの被害



写真-5 クサツゲを加害するツゲノメイガ
またはスミチオン 40%水和剤の 800~1200 倍液を散布するとよい。

マサキ

マサキスガ

1975 年6月上旬に湯ノ川地区の生垣に多発したことがある。マサキの葉を糸でつづって食害するもので、年1世代。加害期は5月下旬~6月で7月上旬に羽化するものが多い。

防除には被害の初期にカルホス乳剤の 1000 倍液

その他マサキの主要害虫として、ユウマダラエダシャクがあるが、この地方での被害はまだあまりめだっていないようである。

シヤクナゲ・ツツジ類

ツツジコナガイガラ

サラサドウダンやリュウキュウツツジに多い害虫で、年1世代。5~6月に新梢の基部や葉の裏側に長さ5mm前後の白色の卵のうを形成するのでよくめだつ。

防除方法は歯ブラシなどで卵のうの除去につとめるとともに幼虫のふ化期にエストツタス乳

剤またはスプラサイド乳剤の各 1000 倍液を散布するとよい。

ツツジゲンバイ

6, 7 月頃, ツツジやシャクナゲの葉の表面が白くカスリ状に脱色してくることがある。葉の裏を見ると体長 3mm 位の黒褐色をした軍配型の虫が多数寄生しており, また少し小型でとげとげした感じの幼虫やタール状の糞も同時に見出される。この虫は年に数世代をくり返し, 5~9 月頃まで常に各段階の虫態をみることができる。ハウス内や日当りのよい植込みなど高温で乾燥しがちな場所に発生しやすいので, レンゲツツジ, セイヨウシャクナゲなどこの虫のつきやすい樹種はとくに保護管理に注意する必要がある。

防除方法は被害発生初期にスミチオンやマラソン乳剤, カルホス乳剤などの 1000 倍液を葉裏によくかかるように散布するか, またはあらかじめエカチン TD 剤などの土壌処理用浸透性殺虫剤を根元にすき込んでやるとよい。

ドクガ

6 月頃エゾヤマツツジやバラ科樹木, 各種の雑草類などに多発して, 葉や花を食害するとともに皮膚炎の原因にもなる重要な害虫である。老熟幼虫は体長 35~40mm, 全体に黒色で毒毛が密生し背面の 2 個所が隆起している。側面の下方および背面の一部には顕著な橙色帯がある(写真-6)。年 1 世代, 若齢幼虫で越冬し, 7 月上旬まで食害をつづけたのち枝葉の間に毒毛を付着させた褐色のマユを作って蛹化する。羽化時期の範囲は 7 月中旬~8 月上旬で, 成虫は開張 30~40mm 前翅にくの字形の褐色の斑紋がある橙黄色の蛾である。

防除方法は分散前の幼虫にスミチオン, マラソン, ディプテレックスの乳剤や水和剤(1000 倍液)または粉剤を反復して散布してやればよい。

その他ツツジ類の害虫としては, 6 月頃枝に褐色球状の卵のうが付着するカタカイガラムシの一種, 夏から秋おそくまでリュウキュウツツジに多く発生するツツジコナジラミ(飛翔力のある微細な白い虫でスス病を誘発する)などがあるがこれらはエストッタス, スプラサイド乳剤の反復散布が有効である。



写真-6 ヤマツツジを加害するドクガ

その他の樹種

以上紹介した緑化樹の害虫のほかに, 函館地方で比較的多く発生する害虫を表示すると次のようになる。

樹種	害虫	加害方法	防除方法
ケヤキ	ケヤキフシアブラ	5月頃葉に袋状の虫えいを形成	展葉期(4月) エチカン・エストックス(乳)散布, (粒)すき込
ハルニレ	アブラムシの一種	同上	同上
メギ ヒイギナテン	アケビコノハ	7~8月枝葉を食害, 9月羽化 幼虫は果実・果菜吸汁害食	エルサン(乳)散布
ネムノキ	キジラミの一種	7~9月葉枝に群生・吸汁, ス ス病誘発	エストックス(乳)散布 天敵(テントウムシ) 保護
マユミ	スガの一種	6~7月に葉を綴って食害, 7月 下旬~8月上旬羽化	スミチオン(乳・水和 剤)散布
カエデ類	イタヤハムシ	7月下旬~8月幼虫・成虫共葉 を食害	エルサン(乳)散布
ムクゲ	ワタノメイガ	7~8月葉をまいて食害, 8月 下旬羽化	マラソン, スミチオン (乳)早期散布, 萌芽枝 整理
	オオアカキリバ	6~8月葉を食害, 蛹越冬, 5 月羽化	カルホス, エルサン (乳)散布
コクワ ブドウ ツタ	トビイロトラガ	7月葉を食害, 8月羽化	同上
ミズキ	キアシドクガ	5月下旬~6月葉を食害, 7月 上・中旬羽化	樹幹上卵塊除去 エルサン, カルホス (乳)早期散布
アオダモ ハシドイ ライラック	イボタロウムシ	7月下旬~8月, 枝が白色ロウ 物質でおおわれる。	春褐色球状の雌成虫 を捕殺, カルホス(乳) 散布
イボタ	ホシシヤク	6月葉を食害, 7月上・中旬羽 化	スミチオン, ディプテレ ックス(乳)早期散布
カンボク テマリカンボク	サンゴジュハムシ	5月下旬~6月中旬葉を穿孔食 害, 7月上旬羽化, 幼虫・成虫 共加害	エルサン(乳)散布

注) 薬剤はいずれも 1000 倍使用

おわりに

近年函館地方で発生した緑化樹の害虫のうち、被害のめだつものについて、樹種別に害虫名、生態および防除方法などを簡単に紹介した。未見の被害も多いと思われるのでさらに調査をつづけ、よりくわしい生態や効果的な防除方法を探究して行きたい。

この稿をまとめるにあたって、カイガラムシやアブラムシの一部について北海道大学高木貞夫助教授、農林省草地試験場宮崎昌久技官に同定していただいた。また被害標本の収集にあたっては函館造園研究クラブ（千田浩会長，20名）の御協力をいただいた。これらの方々に厚くお礼を申し上げる。

なお本稿では著者の観察以外に次の文献を主として参考としたので付記しておく。

1. 一色周知ほか 1965, 1969, 原色日本蛾類幼虫図鑑（上・下）保育社
2. 奥野孝夫ほか 1977 原色樹木病虫害図鑑 保育社
3. 小林富士雄 1977 緑化樹木の病虫害（下）林業技術協会
4. 上住 泰・鍵渡徳次 1972 原色庭本・盆栽の病虫害診断 農山漁村文化湯会

（道南支場）